

「筑波嶺に雪かも降らる」

大久保正

〔筑波嶺爾由伎可母布良留伊奈乎可母可奈思吉兒呂我爾努保佐流可母〕
(卷十四 3351)

筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき子ろが布ほさるかも

『東歌』雑歌の部の常陸の国の歌二首の中に掲げられた一首である。二三の東語を別とすれば注釈の上にあまり問題はなく、これを口訳すれば、

筑波山に雪が降つてゐるのかな。いやさうぢやないかな。いとしいあの子が布をほしてゐるのかな。

というような訳になるであらう。ところでこの歌で問題となるのは、

(一)筑波山に雪が白く降つてゐるのを白い布を乾してゐるのに見立てたのか。

それとも逆に、
(二)白い布を乾してゐるのを、筑波山に白くかかつてゐる雪に見立てたのか。

といふ発想のモチーフの問題である。今手許の諸注釈書をひらいて見ると次の如くで(一)の説をとるものが圧倒的に多い。

(初稿本代匠記)これは筑波根に雪のふれるをおもしろしと見て、かくいひなすなり。

(精撰本代匠記一説)雪ヲ見テ興ジテヨメル歟。

(考)是は本雪なるを布に見なしたり。常陸よりは曝布シラフの調、奉る事統紀に見ゆ。然れば多く見なれし物にたとへたるなり。

(略解)本は雪なるを、布と見なしてよめり。常陸よりは、曝布の調奉る事統紀にみゆ。しかればおほく見なれし物にたとへたる也。

(古義)歌ノ意、実は筑波山に雪の零るを見て、よめるなるべけれど、表には、雪のふれるか、いな然にてはあるまじきか、然にてあらむか、もし然にてあらずば、美しき女が布を干たるにてあらむか、さても見事のけしきや、と打見たるままに疑ひて云るなり。

(新考)考に筑波山に雪の降れるを見てよめるなりといへる如し。卷十九に李をよめる歌に、

わがそのすももの花か庭にちるはだれのいまだのこりたるかも
とあると似たり。

(全釈)筑波山頂に降つた雪を見て、愛する女が織りあげた布を乾したのではないかと、ふと思つたのである。筑波山麓に住む若い衆の詠つた歌であらう。

(全註釈) 山の雪の白くかかつたのを見て詠んだ歌。雪の降つたことを一往否定して、かの子が布を乾したかといつてゐるが、それは構想で、実際は雪を見てかの子に思いを寄せたまでである。民謡ふうの味よく出ている作である。多分歌い伝えられたものであろう。

(窪田氏評釈) 筑波山の上に女の家のある男が、その山をやや遠くから望み、その少し白くなつてゐるのを目を留めて、季節柄、雪かと思つたが、女の布を織つてゐることを聯想して、あの布を乾してゐるのだらうかと思ひ返した心である。布乾せるといふ聯想が男の喜びだつたので、素朴な、庶民的な喜びである。

(佐々木博士評釈) 筑波山上の雪を見て、愛する女が織つた布をほしたのではないかと、面白く疑つたのである。

これに対して(二)の説を採るのは管見では、土屋文明氏が『私注』において、

素朴な感じ方であるが、民謡らしいものである。雪景色を歌つたものではなく、筑波の山麓の聚落の生業として、白布を雪とまがふまで干し並べる、股賑のさまを歌つたものであることは、言ふまでもない。其の点では二又を取るべきであらうか。

と、明確に(一)の説を斥けて(二)の説を主張してゐる以外には、松岡静雄氏が『民族学よ東歌と防人歌』において、

筑波の山に雪が降つたのか、可愛い女が布を乾したのか、どちらかといふことで、女の家を遠望しての歌であるが、或は其女の家あたりを稲岡と称へたので、之に言ひかけたのかも知れぬ。

と述べ、また『万葉集論究』第二には、

第一巻持統天皇の御製にも衣乾有天之香来山(二一八)とあるが、其は初夏の光景を詠ぜられたものなるに反し、雪と誤られたとある以上、此は冬のことであらねばならぬから、尚漂白の為に

布を乾したものと解する方がよい。

とあるのが、文意から推して或いは(二)の説を採るものと解される程度であり、『新講』(改訂版)・総釈(折口信夫)・万葉秀歌(斎葉茂吉)等はいづれとも断じてゐない。ほかに(三)の説として、『精撰本代匠記』に、

又下ニ筑波爾乃伊波毛等村呂爾於都流美豆トヨメルハ滝ト聞ユレバ、ソレヲ雪敷布敷ト見マガヘタル歟。

といふ一説を述べてゐるが、この歌から滝を引き出すべき根拠は全く無く、唐突であり、歌の発想としても不自然であつて到底従ひ得ず、諸注釈みな問題としてゐないのも当然であると考へられる。

そこで結局問題として残るのは(一)と(二)の両説であるが、そのいづれがこの歌の発想の根柢に触れるものであらうか。上述の如く諸注釈において(一)の説が圧倒的多数を占めるが、わたくしはこの歌の(一)表現形式、(二)流伝形態、(三)発生の場などを検討した結果、(二)の土屋説がこの歌の民謡的性格を正しく捉へ、その発想の根柢に触れたものであると考へるに至つた。

以下私見を述べて、わたくしが土屋説を支持する理由を明らかにしたいと思ふ。

第一にこの歌の(一)表現形式であるが、上掲の如く、『新考』には、類歌として、家持の「天平勝至二年三月一日之暮眺 曬春苑桃李花」作歌二首」の中の一首、

わが園の李の花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも

(巻十九、四一四〇)

を挙げてゐる。この歌が李の花を見ての作であることは題詞によつて明らかであるが、この歌ではその李の花を眼前に見ながら、まづ「わが苑の李の花か」とそれを疑つた形であり、その表現手法をそのまま今の歌に当てはめて考へると、筑波山の雪を目の前にしなが

ら、まづこれを疑つた形で歌ひおこし、「愛する女のほす布」といふ連想を引き出したものと解することが可能となる。しかし、まづ第一に漢詩趣味の影響の多分に感じられる知識人家持の純然たる創作詩の表現手法をそのままこの歌に適用することで、個人の作者を持たず、諸家がほとんど口を揃へて指摘する如き民謡性を多分に留めてゐるこの歌の発想と表現を解明し得るか否かには、大きな疑問があると言はなくてはならない。「雪ヲ見テ興ジテ詠メル歟」といふ如き「代匠記」以来の(一)の諸説の考えそのものが、後述の如く抒情詩の見地に立つてこの歌の発想を説明したもので、民謡的な発生の場の考察に欠けてをり、この歌の民謡的性格に即してその発想を解明したものであると言ひ難い。したがつて、民謡的基盤に立つて歌はれてゐるこの歌の表現、構成は、創作詩である家持の表現手法とは別の原理によつて解明せられなくてはならないと考へられる。

第二に、この歌が上の疑問を受けて「否かも」と一応それを否定する形をとりながら、次の疑問に転じてゐることは、単に二つの疑問表現を並列した形の家持の歌の表現手法と異なる一特徴と考へられ、むしろこの歌の表現手法の解明に参考せらるべきは、この歌と同様に、「否をかも」といふ否定的表現を間に挿んで前の疑問から後の疑問へと転ずる形式を採つてゐる。

相見ては千年や去ぬる否をかもわれや然思ふ君待ちがてに

(巻十一、二五三九)

(この歌巻十四東歌の未勸国の相聞部、三四七〇にも重出し、左注に「柿本朝臣人麻呂歌集出也」とある)

の歌であらうと思はれる。この歌では恋の苦しみのために千年も過ぎたかと思ふ心を歌ふのに、まづ「千年や去ぬる」と実際の年月の経過にかけて疑ひ、「否をかも」でこれを反省し、否定する気持を

引き出して、「われや然思ふ」で本意に立ち帰つて、「自分が恋の苦しみからさう思ふのであらうか」と歌つてゐる。即ちいづれも疑問の形で提出されてはゐるが、否定せらるべきは「否をかも」を間に挿んだ前の方の疑問であつて、後者の疑問では無く、事実の後者の方にある。そしてこの「否をかも」の句は、疑問の形をとつてはゐるが否定表現として前者に強く働きかけ、これを打消す作用をしてゐることが認められ、それによつて作者の複雑な心理の表現が全うせられてゐると思はれる。この歌も複雑な恋愛感情を表現した創作的抒情詩であつて、民謡的性格を多分にとどめてゐる「筑波嶺に」の歌の表現の解明には直接適用できないことは前の家持の歌の「あひと変らないが、しかしこの「否をかも」の否定作用は参照され得ると思はれる。それは両歌の表現の場や性格の相違にもかかはらず、「否をかも」といふ共通の語のもつ語性として、それが前に提示した疑問に対して否定の働きをする性格をもつことまでも否定することはできないと思はれるからである。このやうに考へれば、「否をかも」を間に挿んで、その前に疑問の形で提示されてゐる筑波嶺の雪にこの歌のモチーフがあるとする(一)の説は、「相見ては」の歌における「否をかも」の表現作用に照らして見ても疑問であると言はなくてはならないと思はれる。

しかし、この歌のモチーフの考察において更に見逃し難いのは、この歌が示してゐる(向)流伝形態である。

『風俗歌』の「甲斐がね」に、

甲斐が嶺に 白きは雪かや いなをさの甲斐の褰衣や 晒す手作や 晒す手作

とあり、また顯昭の『袖中抄』にも、

かひがねにしるきは雪かいなおさのかひのけこるもさらすてづく

とあるのが、本歌の一変化と見らるべきことはすでに契沖が『精撰本代匠記』に指摘したところである。これらの歌は広く流伝したものと見えて『古今和歌六帖』の拾遺（『夫木抄』雑十五「布」）にも、

をちかたに白きはなにぞいなをさのかひのでこなのさらすてづく
り

といふ歌が出て居り、契沖もすでに指摘してゐる。これらの歌の「いなをさの」はすでに契沖も云ひ、『日本古典文学大系古代歌謡集』所収「風俗歌」の註にも述べてゐる如く、万葉のこの歌の「否をかも」の転訛したものであらう。さうして契沖は、今の万葉の歌を改作したものが転写の誤を経て、『風俗歌』や『古今和歌六帖』の形になつたものと想像してゐるが、この歌の民謡的性情から見てもむしろ謠物としての変化を考へるべきものと思はれる。契沖の云ふ如く、必ずしも万葉の歌が『風俗歌』や『六帖』の歌の原形とは論じられず、むしろこれらの歌の共通の源泉となした民謡的原型を考へるべきものの如く考へられるが、ともあれこの歌がかやうな流伝形態を有して平安朝にまで伝へられてゐることは、この歌の民謡的基盤を示すものとして見逃し得ないことと言はなければならぬ。さうして、このやうな見地に立つて『風俗歌』や『六帖』の流伝形態を見ると、そのいづれにおいても「雪か」「何ぞ」と疑はれてゐるのは手づくりの白い曝布であつて、明らかに曝布がこれらの歌の発想のモチーフをなしてゐることが知られるのである。これらの流伝形態との関連において今の歌の民謡的な型を考へると、東歌のこの歌の発想のモチーフも、雪ではなく、布にあつたものと考へざるを得ないのである。

さうしてその事は更にこの歌が発生した民謡的な場を考察することによつて根本的に確かめられると思はれる。以下に發生の場を考

察することによつてこの歌の性情の究明を試みたいと思ふ。民謡が共同体的な集団生活の所産であつて、集団の結束を固め、生産労働の能率を促がす社会的機能を果たすものとして、常に具体的な場をもつて存在するといふことは、個人の情緒の中に沈潜し、それを解放することを目的とする抒情詩とは根本的に異なる性格であると言はなければならぬ。筑波山の雪はその山麓に住む人々の生活の吉凶を支配し、それを象徴するものとしてはじめて民謡のモチーフとなり得るのであつて、抒情詩人の感動する雪山の美的観照は直接民謡のモチーフとはなり得ない。然らば曝布はどうであるかと言へば、それは筑波山麓に住む人々の生産労働そのものであつた。常陸国から曝布を貢してゐたことは、『続日本紀』和銅七年一月の条に「甲申（廿五日）令_レ相模、常陸、上野、武蔵、下野五国_ヲ、始_テ輸_シ陔調_ヲ。」とあり、更に天平八年五月の条に「辛卯（十二日）、諸國_ノ調布、長_ニ二丈八尺、闊_一尺九寸、庸布_一丈四尺、闊_一尺九寸、諸_ノ爲_シ端_ヲ貢_メ之、常陸_ノ曝布、上総_ノ望_ノ陔細_ノ貢、安房_ノ細布、及出_シ陔_ノ郷_ノ庸布、依_テ旧_ノ貢_メ之」とあるによつて明らかであり、曝布はこれらの生産生活の重要な一部を形成してゐたことが知られる。真淵が「考」にこの点を指摘したのは卓見であるが、詠作と研究を一体としたその抒情歌的解釈のために、この歌の発生した場の考察に進むことができなかった。曝布の生産労働が田植、米舂、草刈などの労働とならんで歌謡發生の場を形成したことは改めて言ふまでもなく、曝布の労働の際に曝布を主題とした恋愛歌謡などが歌はれたさまは、同じ東歌の中に、

多摩川に晒す手づくりさらさら何ぞこの子のこた愛_{かな}しき

（卷十四、三三七三）

の一首を留めてゐるのに照らしても想像に難くない。さうして、卷九の高橋虫麻呂歌集中の作に、「那賀の郡の曝布の歌一首」として、

三葉の中に向へる曝布の絶えず道はむそこに妻もが(一七四五)と歌はれてゐるところから推せば、布をさらす井泉などは生産労働の場であると同時に、男女が集會歌舞する場であつたことも想像でき、わたくしはここにこの歌の基盤となつた民謡發生の具體的な場として、曝布の生産生活を考へることが、もつともよく、この歌の発想契機を理解する道であると考えない訳には行かない。上述の如く『風俗歌』の「甲斐がね」にもこの歌と親縁関係にある歌が載せられ、広くまた長く流伝したらしい形跡を示してゐるのも、これらの歌を支へる曝布生産の共同労働の場が広く存在したからに外ならないと考へられる。

このやうに考へれば、一概にこの万葉の東歌を『風俗歌』の「甲斐が嶺」や『古今六帖』の歌の原形と考へるのは精確を欠き、これらの歌の共通の基盤をなした曝布歌の民謡的類型の存在が考へられる。折口博士が『総釈』において、

これも、後世まで永く続いた民謡の古い類型である。「高い山から谷底見ればお万可愛や布晒す」といふ風に、近世には変化してゐるが、更に「瓜や茄子の花ざかり」と謂つた形をすら分化してゐる。其間に幾多の同類のものがあつたことが思はれる。

と述べてゐるのは、このやうな布曝歌の基本型とその変遷を考へる上に示唆に富む言説である。たしかに「高い山から谷底見れば」の歌には、遠く時代を距てて今の歌と脈絡するものが感じられるのであつて、布をさらすかはいい女を主題としたこの歌謡が、明和九年(1772)の跋文のある『山家鳥虫歌』に、『風俗歌』に上述の「甲斐がね」をどめてゐる甲斐の国で当時謡はれてゐた民謡として採録されてゐるといふことは、この歌の布晒し歌としての民謡類型の成立の古さと、その流伝の久しさを示すまことに貴重な記録であると言はなくてはならない。

以上でわたくしは、この三三五一の東歌が曝布の共同労働の場に發生した民謡を基盤とする歌であるといふ私見をほほ説明し得たかと思ふ。最後に干し並べられた曝布が何故に筑波山に降つた雪に見立てられて歌はれたか、また『風俗歌』でも、甲斐が嶺に白く降つた雪に見立てられて歌はれてゐるのか、その発想の根柢をなす心意について推測をめぐらして結びたいと思ふ。

干し並べられた曝布の白さから雪が連想せられたといふだけではあまりに常識的であつて、その脈絡を必然ならしめた筑波山麓の万葉人の生活心意に根ざした発想の根柢に触れることはできないのではないかと思ふからである。松岡静雄氏は『論究』において、前述の如く、

雪と誤られたとある以上、此は冬のことであらねばならぬから、尚標白の爲に布を乾したものと解する方がよい。

と述べてゐるが、標白のために布をほしたものと解すべきことは上述の通りであるが、これを必ずしも雪の降る時節に関連して解する要はなく、雪の降る季節なので「雪かも降らる」と連想したと解するのは、やはり常識的な抒情詩的解釈であると言はなくてはならない。もとより布の白さと雪の白さの連想が作用してゐることは否定すべくもないが、その発想の根柢には筑波山の雪に対する古代の信仰に根ざした生活の心意があつたのではあるまいか。

現代にもなほ大雪を豊年の兆だとする想念が生きてゐるが、それが折口博士が「花の話」(全集第1巻)や、「峯の雪」(全集第15巻)に詳しく述べてゐるやうな雪の古代信仰に根ざしたものであることは明らかで、そのやうな心意が万葉集の貴族官僚の間にもまだ生きてゐたことは、

葛井の連諸會の、詔に応ふる歌一首

新しき年の始に豊のとししるすとならし雪の降れるは

や、有名な家持の、

(巻十七、三九二五)

三年(天平宝字)正月一日、因幡の国の序に、饗を国郡の司等に賜へる宴の歌一首

新しき年の始の初春の今日ふる雪のいやしけ吉事よきこと

(巻二十、四五二六)

などの作に明らかであり、その外、

紀の朝臣清人の、詔に応ふる歌一首

天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか

(巻十七、三九三三)

冬十一月五日の夜、小雷起り鳴り、雪落りて庭を覆ふ。忽に感憐を懐きて、聊か作れる短歌一首(大伴家持)

消残りの雪にあへ照るあしひきの山橋を苞に摘み来な
などの作はもとより、

柿本朝臣人麻呂の新田部の皇子に献れる歌一首

やすみしし 吾大君 高照らず 日の皇子 しきいます 大殿の上とよよに ひさかたの 天伝ひ来る 雪じもの 往きかよひつつ い

や常世まで (巻三、二六一)

左大臣橋の宿禰(諸兄)の、詔に応ふる歌一首

降る雪の白髪までに大君に仕へ奉れば貴もあるか(三九二二)

などの寿祝の歌の序詞的発想の根柢にもこの心意が作用してゐると認められる。東歌には雪を詠んだものがこの歌と、恋の思ひの積ることを雪にたとへた三三五八の一本歌と、「降る雪の行き過ぎがてぬ」と、同音反覆を利用して序詞中に用ゐた三四二三の計三首を数へるに過ぎず、このやうな信仰の存在を証する作を見出し得ないが、雪を美的な観照の対象とした作は一首も無い。そしてそれを証する歌こそ伝はらないが、都の貴族官僚の雪の歌においてさへ上述

の如く古代信仰の跡をとどめてゐる(『文選』の謝惠運の雪の賦に「盈尺則呈瑞於豊年」の句があるが、これは共通の古代的心意によるもので、漢籍の輸入知識によつて歌つたものではあるまい)とすれば、農耕生産に従事してゐた農民の間にさうした雪の信仰が生活の心意として生きてゐたことは改めて言ふまでもあるまい。豊年の貢とされた雪はかれらの耕作の吉凶を支配するものであつた。さうして、かれらは耕作のほかに、曝して作つた布を貢納しなければならなかつたのである。筑波山がその山麓に住む農民たちの信仰と生活の象徴であつたことは、有名な筑波山の唄歌によつて知られるが、東歌の常陸国歌十二首中、十一首に筑波山が歌はれてをり、かれらの生活心意がいかにかに筑波山につながつてゐたかと思はれる。とすれば、その筑波の霊峰に降る雪こそは、かれらの豊年の貢であり、かれらの幸福の象徴であつたと考へられる。『風俗歌』の「甲斐が嶺」の雪もまた同様の意味をもつてゐたと解されよう。とすれば、かれらの生活につながる曝布の多産をねがふ心意は、その耕作物の豊穰を祈る心意と共通するものであり、筑波の山麓に雪かと思はれるまでに干し並べられた曝布の販ひを詠むことは、その多産を希求して止まない生活心意の現れであつて、わたくしはそこに曝布と筑波山の雪との連繫を必然ならしめた基底にあつた筑波山麓に住む農民の心意が窺はれるのではないかと考へるのである。

(附記) 本稿執筆中、尾崎暢映氏が昭和三十六年九月二十六日の古代文学会例会(於桜楓社)に題して「筑波嶺に雪かも降らる」と題する研究発表を行はれたことを、『国語と国文学』三十七年一月号の学界消息欄で知つたが、遠方に住むためその内容の一端をさへ仄聞し得なかつたのは残念であつた。尾崎氏がその研究を活字に発表せられ、再考の機会を与へられんことを期待して筆を擱く。(昭和三七・四・一一)